

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★



2022-13

監督：ルイス・ブニュエル
脚本：ジャン＝クロード・カリエール
原作：ジョゼフ・ケッセル
出演：カトリーヌ・ドヌーヴ／ジャン・ソレル／ジュヌヴィエーヴ・バージュ／ミシェル・ピッコリ／フランソワーズ・アビアン

昼顔

4Kデジタルリマスター版

1967年／フランス・イタリア合作映画
配給：マーメイドフィルム、コピアポア・フィルム／101分

2022 (令和4) 年2月3日鑑賞

テアトル梅田

👁️👁️ みどころ

私が大学に入学した1967年のベネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞したのが本作。カトリーヌ・ドヌーヴ扮する主人公は、夜は貞淑な人妻だが昼は“昼顔”なる源氏名で娼館に。それは一体なぜ？

当時23歳の彼女の白い肌とブロンドの髪をはじめとする、輝くような美しさに注目！夫を愛しているのに“情欲”から逃げられない自らの“二面性”に苦悩する人妻の進む先は？

武智鉄二監督の『白日夢』（64年）を彷彿させる冒頭のシークエンスは現実？それとも白日夢？何度も登場する、そんなスリリングな展開の面白さを満喫！こりゃ大満足！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■カトリーヌ・ドヌーヴの魅力をあらためて！■

日本では、1945年（昭和20年）生まれの吉永小百合が今なお美しさを保ったまま第一線で女優活動をしているが、フランスで同様の活動をしているのが、カトリーヌ・ドヌーヴ。私が大学に入学した1967年に公開された『昼顔』は絶対に観たかった映画の1つだったが、入学直後から学生運動にのめりこんでいた私は観ることができず、結局何十年も後にTVで放映されたものを観るだけで終わっていた。

したがって、ストーリーを知っていても劇場での感動は味わっていなかったが、今回の4Kデジタルリマスター版の公開でやっとそれが実現！

■フランス文学の“エロさ”を承継した“昼顔”に感激！■

フランスのエロ文学(?)では、マルキド・サドの小説が有名だし、1980年代に大ブームとなった『エマニエル夫人』シリーズのエロぶりも有名。しかして、本作冒頭に見る、SMチックな妄想シーンにびっくり！（感激？）

夫の前ではいつも美しく貞淑な人妻セヴリーヌ（カトリーヌ・ドヌーヴ）が、悶々とこんな妄想を！？さらにドレス姿のまま両手を縛られた美しい彼女に、制裁として、夫とその友人が泥を投げつけると、アレレ、アレレ、彼女の顔には恍惚の表情が・・・？

■□■ 1967年は映画界のベストな時期！ ■□■

1967年と言えば、ハリウッドでは「マカロニ・ウェスタン」が大ヒットし、日本では東宝の「お盆シリーズ」大作の1つ『日本のいちばん長い日』が公開された年だ。吉永小百合×浜田光夫コンビや、加山雄三×星由里子コンビの青春映画もたくさん作られ、当時の日本映画には大きな活力があった。しかし、TVが普及する中、1970年代には映画は斜陽産業となり、日活もロマンポルノ路線に切り替わっていった。そう考えると、1967年は映画界のベストの時期だったかも・・・？

■□■ 強盗犯の若者が本気で恋を！？ ■□■

本作がストーリーとしての面白さを見せるのは、夫の友人に正体がバレてしまったセヴリーヌが「昼顔」からの引退を決意した後、兄貴分のイポリートと共に売春宿を訪れた強盗犯で乱暴なチンピラ男マルセル（ピエール・クレマンティ）が「昼顔」を気に入ったばかりか、本気で「昼顔」を愛してしまったため、ストーリーは予想外の波乱含みの展開に！「昼顔」とのセックスの相性が抜群だったこともあって、「昼顔」の引退に納得できないマルセルは、以降“ストーカー”と化してセヴリーヌの自宅を突きとめたから、さあ大変だ。

ある日、無理やり家の中に押し入ってきたこの乱暴男に、セヴリーヌは、そして夫のピエールはどう対処するの？本作後半では、このマルセルの嫉妬を軸としてさまざまな事件が起きるので、それはあなた自身の目でしっかりと！

■□■ 優しい夫に注目！でもやっぱり女は魔物？ ■□■

本作に見る、夫ピエール（ジャン・ソレル）は優しく、思いやりのある、本当に理想的な夫。不感症の妻は見ていて、なにかと気まぐれで不機嫌なことも多いが、ピエールはいつもそれを温かく見守っているし、“夜の要求”を拒絶されてもじっと我慢しているから、あんたは偉い！しかし、最近明るくなってきたセヴリーヌをみて喜んでるピエールの姿を見ていると、夫として、また、男としての甘さは如何なもの・・・。

しかし、あくまで善良で優しい夫ピエールは後半に至って、マルセルのピストルで撃たれて半身不随になってしまうから、かわいそうなものだ。その責任はピエールには全くなく、すべてはセヴリーヌにあることは明らかだが、ピエールがこのようになってしまった後、セヴリーヌは如何なる献身を？「俺との情事をぶちまけてやる！」と言っていたマルセルに対するセヴリーヌの対応を含めて、後半からラストにかけては、しっかり反省し、“自立した女”になっていくセヴリーヌの姿に注目したい。

2022（令和4）年2月9日記